
時の守護者！

漆黒のK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の守護者！

【コード】

N0331Q

【作者名】

漆黒のK

【あらすじ】

「おまえは、リボーンの世界に行ってもらおう。」
神にそう言われ戸惑う俺。でも俺は行くしかないんだ！

そして、リボーンの世界へ！

次々とおそってくる試練、黒き過去をもつ時のリング、時矢の過去、決してあり得ない原作キャラと主人公のクロス！愛と友情のファンタジー——（嘘ですが何か？

まあ、そんなこんなでやってきたいと思います。

——（日常編です！）

0 時間目 プロローグ

はあ・・・はあ・・・

簡単に言っていると俺は追われていた。ただ、闇雲に道を右へ！左へ！あれから俺は、何分走っていたのだろうか。

「い、行き・止ま・・・り？」

汗が一瞬にして吹き出した。そうしているとヤツが迫ってくる気配がした。そして、振り返ってみると・・・ヤツがバカでかい鎌を振り上げていた。今までの短い人生がフラッシュバックした。

世界は、暗転した。

――

名前 風 作時 ふう さくとき

13歳

特技・趣味 バスケットボール 手品

好きな食べ物 甘いもの全般

嫌いな食べ物 辛いもの全般

一時間目 天国 ？

「ふう、ここは？」

「目覚めたようだな。時の王子よ。」

隣に座ってたのは、ひげモジャジイだった。

「し、失礼な！私は、神であるぞ！口を慎めい。」

ふうん そうなんだ。・・・嘘っぽいけど。

「うそではない。」

「うお！ひ、ひとの心を読むな！プライバシーの侵害で訴えるぞ！」

「おおつと失礼した。・・・ってわしゃく上田・・・じゃなかった神だ！」

「ふうん。・・・そんなことより、時の王子ってなんだ？」

「そんなことって・・・ひどいじゃ「うるせえ」・・・すみません。」

いつの間にか立場が逆転してしまった。・・・神は、地面にのの字を書くのをやめ、真剣な顔になった。

「お主に死んでもらった事には、訳がある。」

「！！し、死んでもらった？」

俺は飛びつこうとしたが、見えない壁に阻まれてしまった。

「まあ、話は最後まで聞け！・・・ふう、もう簡単に話してしまおう。・・・リボーンの世界の時の守護者が、死んだ。・・・その代わりがおまえだ！」

「は？ちよつと待てよ！なんでそれと俺がお前に殺されて呼ばれたん」後継者がおまえしかいないからだ。「！！！」

「なんでだよ」前の時の守護者はお前の父親だからな。俺もいろいろ試してみた。だが、適合者ではないものが、リングを持つと1日で死んでしまうからだ。だから血縁者のお前にしかできないんだ。」

「・・・そっかじゃあ行くわ。」

「む？あんなに嫌がってたではないか。」

「理由が分かったから。リボーンの世界にも行ってみたいし！」

「そうか。じゃ逝ってこい！」

え？早くね？

「時は金なりじゃ。」

なるほど。・・・じゃねえ！！

「下界に下りたら、また指示する！」

ちよっ、心の準備は？「家でしろ！」

あ~~~~~れ~~~~

「・・・頑張れよ。」

そっいい残し、神は消えた。

その声は、誰か聞いていたのだろうか？

三時間目 リボーンの世界へ

がばっ！

俺はベットから起き上がった。

「知らない部屋だ・・・」

やっぱ、俺は死んだのか。ってことはここはリボーンの世界か。時計を見ると七時七分ぐらい。

俺はリビングにきた。どうやら体が覚えていたらしい。

テーブルを見てみるとメモがあった。読んでみると、

「拝啓ごほつごほ・・・神じゃ！最低限の事は体が覚えているだろう。あと言っただけなかつた事は、お主が転校生な事。後、両親が居ないこと、まあこれはどうでもいいことなんじゃが、名前が四条時矢になつてゐる事だ。以上！

有り難い神のメモ。」

・・・いやいやどうでもよくないよ！―（名前）

と思ひながら時計を見ると、時間がないことに気付いた。

・・・いくか！

そう思い、学校に足を向けた。

三時間目 リボーンの世界へ（後書き）

なんか中途半端になりそうだから一度切っておこう

四時間目 学校へ！（前書き）

冬休みが後三日、宿題がんばろう

四時間目 学校へ！

学校に着いた俺は、職員室に向かった。

職員室に挨拶をした俺は、教室に向かった。

どうやら2・Aのようだ。

「ここで待ってくれ。合図したら入ってくれ。」

と言われた俺はその場で待っていた。何となくポケットに手をつっこんだ俺は何か異物があった。それを取りだそうとした瞬間合図があったので見るのは後にした。

教室に入った瞬間女子からは歓声、男子からは、殺気が飛んできた。「説明しよう！彼は元の世界は可愛想なので転生の時顔を変えてやったのさ！」

BY神

と説明している間に自己紹介を終えた俺は指定された席へ向かった。隣は沢田 綱吉だった。

彼をみた俺の感想は、以外にいけている顔だったなと言う感想だった！

・・昼休み・・

休み時間さんざん女子に追いかけられた俺は屋上に逃げた。

そういえばポケットに入ってたのは・・・？
とりだして見るとそれは、

白いリングだった。

5 時間目 原作と話す！

「白・いリング？ ！！誰！」

俺はとつさに叫んだ。

「ばれてたか。」

「っ！あいつは！」

「ちやおっす。」

リポーンだ！やべえ、可愛い！・・・鼻血でそうだ。まっ怪しまれんのはイヤだから。

「なに？このあかんぼう「知らん振りなんかするな。どこのマフィアだ。」・・・いつから見たた呪われし赤ん坊、リポーン。」

「屋上にお前が来てからだぞ。さあ、答えたんだ。俺の質問にも答えやがれ。」

「むう、どこのマフィアでもないぞ。」

「嘘をつけ。じゃあさっきのリングは何だ？」

うっ、あからさまに疑ってんな。

「・・・ほらよ。」

俺はリングを赤ん坊に投げた。すると赤ん坊は

「こんな属性見たことがねえ、いったいなにもんだ？」

うーん。ここで転生者です！と言っても信じねえしな。

「・・・ただの中学生だ。」

そうか、と言わんばかりの顔を浮かべリポーンは消えていった。

そして、リングを手に取った瞬間、空が暗くなった。

上を見上げてみると、雲雀の顔が目に入った。俺が掠れた笑いをしている。

「君、それ校則違反だよ・・・咬み殺す！」

ある肉食動物は、トンファーを振りあげた。

5 時間目 原作と話す！（後書き）

原作キャラが書きにくい。当たり前だけど。

六時間目 原作と戦う！（前書き）

どうも、漆黒のKです。

最近この名前より、“漆黒クン”みたいな名前の方が良かったかなと正直思っていますw

まあ、そんなことを考えながら、ひっそりとやりたいと思います！

六時間目 原作と戦う！

「っ！、紙一重！」

反応できたのは正直奇跡だと思う。

「わお、あれを避けるんだ、・・・草食動物の分際で。（ボソツと）

「
しっかり聞こえてますよ！雲雀さん！」

説明しよう！元の世界では、運動が全然ダメで、現実のツナと呼ばれていたが、転生したお陰で、筋肉や運動神経、感覚神経が数倍上がっているのだ！だから最初の攻撃が易々と避けられたのだ！

B Y 神

くっ、そう言うことは最初のメモに書いていて欲しかったな。

テへw

B Y 神

テへじゃねえよ！

wが抜けとる！

B Y 神

どうでもいい！そんなこと「戦いの最中に考えごとかい？・・・隙だらけだよ！」

顔面にトンファーが飛んできた。

— (これは、当たる！)
その時、リングが光った！！！！

六時間目 原作と戦う！（後書き）

いつリングはめたの？とはきかんで下さい。

六時間目 原作と戦う！ぱーと ツー

「っつ！」

雲雀さんだけでなく俺も驚いてしまった。

「・・・何？、それ。」

リングから純白の炎が出た。

次の瞬間、地球の自転が、止まった。それと同じとき、全ての”時”が止まった。”時矢”以外の

・・・なんだこれ？凄すぎるだろ。

”どこまで凄い力が解ったか？”

頭の中から声が。この声は、

「神、か？」

そつだ。と頭の中に響いてきた。

”お前はまだその力を操りきれてない。”

「そんなくらい解ってるよ。」

”完璧にその力を制御できるまでその力を多用しすぎるなよ。それは体に負担をかけすぎる。”

「ああ。」

”それじゃあ、またな！”

そうして時は動き始めた。――

時が動いたときもう雲雀の前に誰もいなかった。

七時間目 原作と話す！ぱーと ツー

雲雀戦の後俺は教室に戻っていた。

「ふう。」

と一息ついていると丁度チャイムが鳴った。

その後は何事もなく学校は終わった。

さっさと帰ろうとすると

「あつ、時矢は、家何処なのかな？」

ツナってこんなキャラだっけ？と思いつながら冷や汗をかいていた。

—（住所知らねえ）

と思いつダツシユで逃げようかと考えていたら、

（なっ！口が。）

勝手に動いていた。

「じゃあ近いね。一緒に帰らない？」

俺は戸惑いながら頷いた。

「あつ紹介が遅れたね、俺は、沢田綱吉。みんなツナって呼んでる。

よろs「俺は山本武つてんだ」！山本。「十代目ー！早く帰りまし

よう！」「あれが獄寺君。顔は怖いけどいい人だよ。」

うわーやっぱツナ命だなあの人。

「・・・よろしく。」

俺は、営業スマイル120%の笑みを浮かべ帰路についた。

あの営業スマイルを見た女子が倒れて保険室に運ばれたのはまた別の話だ。

七時間目 原作と話す！ぱーと ツー（後書き）

今の所話は約100%オリジナルだと思います。

次からは、原作入れたいと思います。

不定期更新ですが、一日に二回は、更新したいと思います。

短いから。

では、感想、誤字指摘等宜しくです。

八時間目 ランボの保育係決め！

俺はリボンに拉致られた。

理由は、ランボの保育係を決めるそうだからだ。

「俺、関係ないんですけど・・・」

「ちなみに保育係になったらボスの右腕な。」

「おーいむs「俺、ランボ好きでした。」うう、家に帰りたい。」

ちなみに縄で腕を締めあげられている。

すっかり自分の世界に入っていた俺は何かが発火する音で目が醒めた。

「てめえ！・・・一遍死んでこい！」

「ぐびゃあ！」

「（うわっ！痛そ。）

と思っていたら山本の番になった。

「お前キャッチボールって知ってたか？これでボールを取るんだぞ。」

「

うわー来たよ、これ。何とかして止めたいけど手使えないし・・・

ご愁傷様・・・

「っし、いくぜ。そーそーれ！！！」

次の瞬間バキッツツツ音が響いた。・・・ランボ、ノックアウト・・・

・

と思ったりしてたら、

「何やってるんですかー！」

と威勢のいい声が響いた。この声は、h「ハル!?」だ。・・・セ

リフ盗られた、ツナに・・・

ズガアアアアアアアン！

と音が響いた！

その音の方を向いて見るとそこには、

十年後ランボがいた。

九時間目 ランボの保育係決め！ ぱーと ツー（前書き）

今思うと、これ、原作では、一年の時の話だ・・・。

まあいいか。

九時間目 ランボの保育係決め！ ぱーと ツー

「おお、若き時矢さん。久しぶりですね。」

「む？久しぶしいてーあー！エロい人です！胸のボタン閉めないと通報しますよ！」ぐっ！またこのパターンか！」

「そーだ！そーだ！ハルの言うことはもっともだ！それにお前は首輪じゃなくて鼻輪がお似合いだ！」

（（獄寺君の言ってることはただのイジメだー！））

と獄寺が言ったことに俺とツナは、心の中で突っ込んだ。

「俺・・・失礼します・・・」

「帰れ！帰れ！」

と言った後に俺の耳には、が・ま・んと聞こえた。

・・・ランボが去っていきこうとすると、

「お前角落としてんぞ。」

と山本が言った。

「あつ、投げてください。」

とランボが小さな声で言った。

俺はと言つと、ランボに哀れみの念を贈った。だって助けられねえんだもの。

「あいよー！」

と山本の投げた角は眉間に見事刺さった。

「が・ま・・・うわああああああん！」

「結局こうなるのか。」

「やっぱ面倒はツナがみる。」

「じゃあ俺は何のために此処に来た？」

「・・・あ、いたんだ。（^{おほ}のか）——」「」

リボーンを除くみんなが言った。くっ！俺はそんなに影薄いのか。

「お前には違う用で来てもらった。」

「なんだよ。」

「マフィアに入らねえか？」

十時間目 ランボの保育係決めの後！（前書き）

タイトルがグダグダ・・・

メンドクサイから書かなかったんじゃないぞ！
オレハジュケンセイダカラカケナカッタんだ！

十時間目 ランボの保育係決めの後！

「……は？」「……」

リポーン以外のみんなが驚いている。もちろん俺も。

啞然としている俺にもう一度、

「入るのか、入らねえのかはつきりしろ。」

と言った。

俺は、驚いていた。なんせあのリポーンからそんなアプローチが来るとは思わなかったからだ。

どう言おうかと迷っていたら、

「ボンゴレに入る気はない。俺が入るのは、ルール違反だからな。」

と俺が思っていない事が勝手に口から飛び出した。

ツナはどうやら安心しているようだ。

「が、……お前等がやるヤンチャ事ぐらいは付き合ってやるぞ。」

「ニツ、そうか。」

と俺が言った言葉に笑った。

「……だから、この縄外してくんねえか？」

「ツナ、外してやれ。」

そのリポーンの言葉に弾かれたように、縄を解き始めた。

「……ふー、やっとほどけたか。」

と俺は言った。……腕があるっていいね！

「しゃ！帰るとすつか！」

と言いながら俺はツナ宅を出ていった。

……今日は疲れたからコンビ二弁当にしよう。と、と時矢が思ったのは、また別の話である。

そして、ツナが何で時矢をマフィアに誘ったのかを問い詰めようと
して帰り討ちにあったのはもっと別の話である。

十時間目 ランボの保育係決めの後！（後書き）

近々、オリキャラを二人出そうと思います！一人は名前等々決めて
いますが、もう一人は名前が思い浮かばない・・・。

そのキャラは男でも女でも構いません！

何か名前ありませんか？・・・敵役なんだけどね・・・。

十一時間目 ケーキ屋？での出来事（後書き）

次ぐらいには、オリキャラを出したいです！

十二時間目 ケーキ屋の後の事！（前書き）

タイトルが思い浮かばない・・・

十二時間目 ケーキ屋の後の事！

「じゃあ私たちこっちなんで・・・。」

「ああ、じゃあな。」

と交差点で京子達と別れた俺は、

「飯、買わなきゃな。」

と俺は身を翻した。その時衝撃が後ろから俺を襲った。

「っ！」

俺は数メートル飛ばされて電柱に衝突してやっと止まった。

俺は痛みを堪えながら俺がさっきまで立っていた場所を見ると、そこには、

巨大クレーターがあった。

「なっ！」

そのクレーターの中央に人が立っていた。

「あーアーアーよけちゃったか。まっ！この程度ノ攻撃、ヨけて当然ダケど。」

「ぐっ！テメエは誰だ！」

「私？私は、ソルク・ゲインよ。まア、知った所デ意味ナインだけド！ネ？」

十二時間目 ケーキ屋の後の事！（後書き）

名前の由来は特にありません！

十三時間目 十字路での戦い！（前書き）

夕、タイトルが・・・

十三時間目 十字路での戦い!

「ハルサイドー」

「はひっ! ケーキ屋に忘れ物したって言ってここまで戻ってきたんですが。ハルここ何処ですかー!!? ってあれ? 確かあの人つて、時矢さん?」

よし! 道を聞いてみようと思えば近づくなら、

「アラあら、迷子ですか?」

と何処からか声が聞こえてくる。すると時矢さんはとっさに顔をこちらに向けて、

「ハル!? ハル!? 今すぐここからハル!」遅イデスよオオオオ!」なっ! しまった!」

時矢さんの前に居たらしい人がこちらに向かってくる。ハルハルその後すぐに腹部に衝撃が走った。

薄れゆく景色からいつの間にか近づいていた彼女の笑い顔と時矢さんの目を見開いた顔が見えた。

彼女の口はこう動いた。

「バイバイ」とハルハル

「ハルハルサイドー」

「あゝア、呆気ねえナア。ただの人間はヨオ! ハルハル? どうした? 異常者ア?」

「して……る、こして……る、ころし……やる、殺してやる、殺してやる!」

「かっつ。……楽しい殺し合いノ始まりイ!」

かっつ。これで、時の暴走が見られる! あゝあ、ハルハル楽しみだ。

十三時間目 十字路での戦い！（後書き）

ただいま、話をドンドン脱線させてます・・・
正直後この話、四話程度ぐらい続くかも！

・・・すみません！！！！

この話終わったら原作になるべく早く戻したいと思います。

十四時間目 時の暴走！

「……？？？サイド……」

（……この感じ……何かイヤな予感が……早く行かなければ。）

「スキル発動……」音「……」

先ほどから陸上の短距離選手もビックリな走りを見せていた彼女は、何か呟いた途端に、一瞬にしてスピードが跳ね上がった。

音速に！

（間にあってくれ！怒りに飲まれないで。）

彼女は走る。会ったこともない少年の元に！

「……ソルクサイド……」

「きゃはははハハは！楽しい！楽しいぞ！もっと楽しませろ！」

そういつてる間にも相手から拳が飛んでくる。

少し劣性気味だ。

（ちっ！これが「暴走」の力か！くっくっく。それニシテもリング以外から炎が出るとはナ。）

そう、炎は彼のリングからだけじゃなくて、体からも出ていた。純白の……いや、黒みがあった白い炎が。

十五時間目 時の暴走！ パート ツ

「ソルクサイドー」

あれから何分間すさまじい攻防が続いたのだろうか。ソルクはもう息を切らしていた。

（クっ！サスがにコのスPEEDでの戦いハキついナ。）

そんな彼女の願いもむなしく相手は攻撃の手を緩めない。いやそれどころか少しづつスピードがあがっている。

（イヤイヤ、コイツは予想以上のーガッツっ！）

彼は一気にラストスパートをかけたのか一瞬で引いた腕が戻ってきた。

防御ーと彼女は反射的に腕を上にあげた。

でもそんな努力も虚しく間にあわなかった。

顔をぶん殴られ吹っ飛んでいった。

「グウツっ！！」

すぐ後ろの壁に衝突し、肺の中の空気が一気に外に出ていった。

そんな彼女に追い打ちをかけるようにいつの間にか接近していた彼女は彼女の髪を掴み膝を上げて顔に当てた。

（コリヤ、本格的にヤバイ・・・な・・・）

「ー？？？サイドー」

彼の元へ行ってみると想像以上に酷かった。過去にああなってしまうた人は一度だけ見たことがある。

（あのとときの惨劇を起こすのはもうイヤだ。だから私は！）

「封印術ーー作動ーー>罪あるものに救いの手を。ーー<」
絶対に止めてみせる！！

こうして彼女の詠唱が始まった。

十六時間目 黒い日の過去・・・！（前書き）

遅くなったのは、

訳があります。

その訳とは、

何回投票してもエラーがでてやる気が無くなった・・・！！！！
攻めたいなら攻めるがいいさ！

十六時間目 黒い日の過去・・・！

――？？？――

白い兜の男は門の前にたっていた。黒い炎を携えながら。

男は門を見上げていた。

何かを怨むそんな目で。

すると黒い炎は、大きい門を包んだよ。

すると門は、一瞬で灰になり、

黒い夜空へ舞い上がった。

男はドンドン歩いている。暗いお城のその中を

黒い炎を携えながら。

兜の男は歩いてく。

すると前から誰か来る。ぎよつとした目でこちらを見てる。

男は何かを叫んでる。止まれ。止まれ。と促すように。

それでも兜の男は止まらない。

男は懐から銃を出す。兜の男に向かって。

すると男を黒い炎が包んだよ。

その次にはもう居ない。

誰も居ない。

黒い銃を残して。

男はズンズン進んでく。

黒い炎を携えながら。

十六時間目 黒い日の過去・・・！（後書き）

どうだったでしょうか。

いきなりなんだ？と思った人は居ることでしょう。

ま、いずれ分かるでしょう。

・・・ホントはこの話は、後二、三話後にする予定でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0331q/>

時の守護者！

2011年2月18日21時32分発行